

学風が自由な一流大学

北京第二外国語学院学生代表

見学日時：2019年5月29日（水）14:00-19:30

見学場所：京都大学

見学概要

悠久の歴史と伝統文化を持ちながら政治の中心や大都市から離れた京都は、学者にとっては学問や研究に没頭できる最も理想的な場所である。私たちが交流に訪れた最初の大学は京都大学である。キャンパス内の建築物は古典的な様相を多く残しており、穏やかさと厳肅さが感じられた。またここには優れた実験室もあり、古典と現代が共存した学校だと言える。

韓准教授からの紹介を聞いた私たちは京都大学の歴史や特徴について初歩的な理解を得ることができた。その中で京都大学の「自由の学風と創造の精神」という理念が印象深かった。学校側は学習や生活面において学生に過度な負担を与えることはせず、ここでは学生は学習における自由さを最大限満喫すると同時に自らの能力を思う存分発揮している。ガンの免疫療法であれゴリラの繁殖であれ、京都大学はすべてを歓迎している。



紹介が終わった後、私たちは京都大学の学生らといくつかの話題について約一時間のグループ討論を行った。それらの話題は日中両国ひいては世界全体における男女の平等、仕事の負担、環境、食品の安全等の内容に関わるものであった。討論の際、京都大学の学生はこうした討論に慣れている様子で、各問題について適切な討論時間を決めた上で掘り下げていった。こうした手法を活用することで私たちの討論における目的が明確になり、また理路整然となるなどとても効率的であった。

討論が終わった後、すべての学生が講堂に移動し討論結果の発表会に参加した。ここでは各グループから討論結果の発表があった。各グループの代表者も彼らの優れた総括能力、論理的思考力そして言語表現能力を示し、会場の学生らは日中両国の社会問題について一定の理解を得るなど多くの収穫が得られた。

発表会終了後、私たちはレストランに移動し懇親会に参加した。懇親会では中国と日本の学生らが共に美食に舌鼓を打ち、交流を深めていった。皆は話題が尽きることなく、会場はとても活気に満ち、とても楽しい夜を過ごすことができた。



発表会終了後、私たちはレストランに移動し懇親会に参加した。懇親会では中国と日本の学生らが共に美食に舌鼓を打ち、交流を深めていった。皆は話題が尽きることなく、会場はとても活気に満ち、とても楽しい夜を過ごすことができた。

なぜですか？

京都大学には学生宿舎が存在するが、私たちの知る学生宿舎との違いは、彼らの宿舎は学生が自ら管理をし、その管理の結果の如何に関わらず、学校側は関わらないということである。ここでは学生らは自分たちがしたいことを何でもすることができる。またここでは学生らは完全な自由と自主を享受している。これが名高い京都大学の吉田寮である。

吉田寮は1913年に建てられ、今日まですでに105年の歴史を有する日本に現存する最古の宿舎で、今でも200名余りの学生が住んでいる。敷地内には鶏が一羽放し飼いされ、孔雀や山羊の姿も見かけることができる。また小説家の故・梶井基次郎、ノーベル物理学賞受賞者赤崎勇等の個性豊かな文化人や学者がここで育っている。

「立場の平等」を実現するため、吉田寮内には「上下関係を作らず、敬語を使わない」との文化がある。この他最も魅力的なのはその極めて安い生活費であり、吉田寮の家賃は水道・電気料金を含めても毎月約2500円（約150人民元）となっている。吉田寮は京都大学に籍を置く学生であれば誰でも入寮資格がある。

吉田寮はまた文化の発祥地である。新築された吉田寮の食堂では演劇や音楽の実況録画、映画上映等のイベントを行っており、寮生以外の多くの人が集まっている。こうした理由からか、学外でも「吉田寮存続」を支援する声が多い。

京都大学の学生にとって吉田寮は100年以上の歴史を持つ建築物であるというだけでなく、何世代もの京都大学の学生が積み重ねてきた個性を維持している存在でもある。

感想

京都大学の見学では多くの収穫が得られた。韓准教授からの紹介により私たちは京都大学の自由の学風に衝撃を受けた。それは完全な自由で、学生らはこうした自由を享受すると同時に学校側もまた学生らのこうした自由の権利を保護している。こうした自由はまた京都大学の教授や学生らの研究への取り組みにも表れていて、彼らの多くは自身の興味もしくは人間社会の発展への思いから自身の研究を行っている。こうした純粋さに私はとても驚かされた。学風の自由さに感銘を受けると同時に、私は京都大学の人々の本当にしたいことを続ける姿勢に頭が下がる思いであった。名声や利益のためではなく単純に興味から研究を行うという点こそ京都大学がノーベル賞受賞者を多く輩出する理由の一つだと思った。同じ大学生である私たちもまた私たちがこの社会に何をもたらすことができるのか、自分の能力がこの社会にどんな影響を与えることができるのかを積極的に考え、努力をしていく必要がある。京都大学において私たちはただの感想に止まらない色々な思いが得られた。